■令和7年2月定例記者会見

日時：令和7年2月10日(月)午後4時～5時

場所：吹田市役所高層棟4階特別会議室

吹田市広報課

それでは記者の皆様からご質問をお受けしたいと存じますが、質疑の中で詳細についてお答えできない場合は、後ほど担当の方で対応いたしますので、ご了承くださいますようお願いいたします。それではよろしく申し上げます。

記者

市長にお尋ねしたいんですけど、事業これだけある中では、市長が特に力を入れたい分野と
いいますか、特に今回目玉になっているものは何ですか？

後藤市長

特に目玉というよりも、すべきことをしっかりやっている中で、恐らく本市の特徴としては、この24番から29番というのは、今まさにご質問のあったこのようなまちづくりの大きな予算の業務というのは、人口減少、財政危機に見舞われている自治体では、とてもできる事業ではないです。そういう意味で非常に特徴的な事業であります。ただ、我々にとっては、この財政状況において人口も増えている中で、これは必須の事業だと思っています。そういう御理解をいただければありがたいんですけども。

記者

将来にわたってこのまちで安心して住んでいただくためにということですか？

後藤市長

そうですね。将来の市民の命がかかっていますので。

あと、福祉・健康、非常に専門的なことが並んでいますけれども、健都を運営している市として、こういうことをかなり特徴的な事業を進めています。(資料の)緑の部分なんですけれども5番から10番まで。福祉であり、医療でありという、ここも特徴的ではないかなと思います。

記者

ありがとうございます。

吹田市広報課

他にご質問ございますでしょうか？

記者

この市民税の個人の部分が増えているというのは、定額減税があるにしても、働き盛りの世代の方の人口の増加というのが要因に考えられるということでしょうか。

行政経営部長

そうですね。個人市民税の課税対象者というか納税者の数の伸びというところも見込んでいるということです。

記者

それと職員のハラスメントの条例の件なんですけれども、窓口についていらっしゃるの委託先の職員の方が多いと思うんですけども、その方も対象になるんですか。最後ちょっとわからなかったんですけども。

総務部長

そうですね。窓口の委託の業者さんに我々が直接指導とかはできないんですけども、大元の受託事業者と一緒にこういった対策をとっていくというところは連携してやっていきたいなと思っています。

記者

具体的に窓口の委託先の職員がカスハラ的な行為を受けた時に、これは条例が適応されるんですか？

総務部長

そういう風に考えています。

記者

市長にお伺いしたいんですけども、先ほどの下水道管の説明がありましたけれども、市長自身、重要だと考えておられるということだと思んですが、やはり埼玉の事例を見て、人ごとではないなというような危機感みたいなものを感じたということでしょうか。

後藤市長

規模の違いというのは決定的にあると思います。あれだけの下水道管、うちに入っていますので。驚きました。ただ、小規模の下水道管、本管というのは市内に網の目という言いすぎですが、ネットワークで広がっていますので。こういう問題は昔から実は取り上げられていました。大規模なところで、先ほどの下水道部長が言いましたけれども、一つは内部環

境として老朽化、それから内部の状態ですね。今回の硫化水素の話でも出ていましたけど。あと、ひょっとしたら施工方法による、それに起因する内部状況と外部環境として化学的な土壌条件、それと物理的な地盤のずれとか動き。もう一つは、知られているのは横にすぐ水道管が走っていて、水道管のピンホールで他の管、下水道もその一つですけど、穴をあけてしまうというのは事例で知られています。いろんな調べ方があるんですけども、テレビでやっている超音波の調べ方もありますし、水道の漏水をチェックすることで事前に見つけることもできるし、そこは水道、下水道両方でこれまでも対応はしています。ただ、それが完全かと言われると。できるだけの努力はしています。

辰谷副市長

道路管理者側でも路面下の空洞調査ってあるんです。車を走らせて見るやつ。

市長

超音波ですね。

辰谷副市長

超音波です。これも全部やっております、かなりこの令和元年から取り組んで、既にもう130キロぐらいやっています。それで見つかっているんですよ。10センチ、20センチぐらいのものが。あんなすごいのは無いですよ、当然。こういうのも従前からやっております。

記者

10センチ、20センチというのは、空洞があるということですか？どういうことなんでしょう？

辰谷副市長

空洞です。面積の部分がありますけど、厚さです。厚さの方が怖いんですけど。厚さが10センチということはないことは無いね？

土木部長

そうですね。今言いました必ず探査車に出てきたら何かの異常はあるので、それで今度はスコープを入れて2次調査というのをやっています。そのスコープを入れて、2次調査で穴が大きいものについては舗装を割ってみて、再舗装をかける、もしくは小さいものでしたら、上から少し軽く詰めてっていう風な対策をこの間ずっと令和元年度からやっております、今、緊急交通路は既に終わっています。

それから1級、2級の幹線道路も既に終わっています。それ以外の路線というのを今、市内6ブロックに分けて取り組んでいまして、令和10年度までに一応いわゆる大きな道路です

けども、そこについては全て終わるということで、市の場合はやっています。大体ですけども、その中で異常が年に、10 か所から 20 か所ぐらいは探査車によって異常が上がります。それについて、今言うように、その部分については2次調査、スコープ調査をして対応をやっているというのが吹田市の取組です。

記者

ありがとうございます。

吹田市広報課

他にご質問はございますでしょうか？

記者

予算の中で「NEW」がついていて、比較的額が大きいものなんですけれども、私立保育所の人件費の補助が大きいと思うんですけれども、私立保育所というのは、認可、認可外どっちもという理解でよろしいでしょうか？

行政経営部長

どっちもだと思います。ちょっと確認させていただいて、後ほど回答したいと思います。

記者

あとは、あげていただいているもの以外で、特に新規事業でというのはないという認識で大丈夫でしょうか？

行政経営部長

細かいものを除けば以上です。

記者

わかりました。

行政経営部長

細かいというのは、法改正もあってやっていくというのはいくつかありますけども。

記者

わかりました。

市長にお伺いしたいんですけれども、先ほどおっしゃっていただいていたみたいに、健都運営のところがやっぱり特徴的なところという風におっしゃっていただいていたんですけれ

ども、当初予算の取り組みに対する市長の思いみたいところで、健都のあたりが大きいのかなと推察したんですけれども、その辺の意気込みじゃないですけれども、こういう風に予算取って、こういう風に運営していきますみたいところってコメントみたいなものありますか？

後藤市長

そうですね。健都の中でというよりも、健都を核にした健康医療の取組を全市的に進めますというコメントになりますかね。

記者

全市的に？

後藤市長

はい。やはり核というワードが大きいですね。

記者

健都を核にして健康医療の取り組みを全市的に進めていくという意気込みの予算という？

後藤市長

はい。

記者

わかりました。ありがとうございます。

吹田市広報課

他にご質問はございますでしょうか？

記者

資料 2 の 1「人権・市民自治」のところで、市民課の方にお伺いすることになるんですかね？新たなサービスの導入についてお伺いしたいんですけれども、4つのサービスのおくやみコーナーのみ、令和 8 年度から実施ということですが、残りは 7 年度に実施されるということで、それぞれの事業にお幾らかかるのかということと、それぞれの事業がどういった事業なのかというのをちょっと簡単にご説明いただきたいのと、この具体的に令和 7 年のいつから実施するなど決まっておりましたら教えていただきたいです。

行政経営部長

金額の内訳等、詳細なそれぞれの時期はちょっと後ほど確認させていただきます。簡単な内容なんですけれども、まず①につきましては、マイナンバーカードをお持ちの方であれば、コンビニの発行機で割りと簡単な操作で発行できるようにはなっているんですけれども、マイナンバーを持っておられるにもかかわらず、そのあたりを使ってみたことがない方もまだおられるということで、同じような発行の機械を市民課の窓口を設置をして、サポートの方がついて「こうやって、この番号を入れて」というような形のサポートをさせていただくようなサービスというように聞いています。

AI チャットボットにつきましては問合せ対応の部分、AI のチャットで対応するという機能を入れるというものです。

定型の業務委託というのは、いわゆる市民課の窓口のなかで、定型的な対応、職員による調査であったり、判断であったり、確認といったところが要らないような業務については、委託事業者の方にお任せをしていくということになります。

おくやみコーナーは令和8年度からということで予定しておりますけれども、各地でこういったサービス導入の話があるんですけれども、ご親族が亡くなられたときに、通常であれば市民課だけではなくて、介護保険であれば介護、国保であれば国保、税もあれば税といった、かなりの必要数の窓口をまわって、その都度お名前を書いたり、死亡年月日を書いたりといったことを親族の方が通常必要となるんですけれども、それをワンストップで、なるべく書く回数であったり、記入の内容であったりとかもお聞きをすれば、各必要な窓口の方へデータをやりとりして、そこでワンストップでお帰りいただくことができるというものです。待ち時間とかについても、いろいろ工夫をしていると思うんですけれども、そういったサービスになります。吹田では初めての取組になります。

時期と金額内訳については後ほど。

行政経営部参事

金額なんですけれども、全て委託でやる予定をしております、内訳は出ていない形になります。これパッケージで1億なりの金額という形になっておりますので、内訳がちょっとないという形になります。

時期については確か秋口ぐらいだったかと思うんですけれども、そちらはちょっと確認をさせていただきます。

記者

秋ぐらいになるということで、ありがとうございます。

再度お伺いしたいんですけれども、2つ目のAIチャットボットが、これがホームページか何かでAIに関するチャットが使えるということなんですか？

行政経営部長

戸籍であったりとか、市民課で取り扱う業務の転出入であったりとか、さまざま取り扱っているんですけども、その際の、例えば必要書類とか、どこに行けばいいとか、そういったことであれば、これまでであれば全部電話でのお問い合わせ対応ということだったと思うんですけども、AIでのお答えが可能になります。夜間等の対応もできるようになると思っています。

記者

ありがとうございます。

あと、3番目の委託なんですけども、これは前から委託していたけれどもっていう話なんですかね。

行政経営部長

基本的には直営ということで、市の職員が正規職員と会計年度任用職員とで、職員が直で市民課の窓口業務というのは担っておったんですけども、そのうち任せられる部分を民間事業者にお願いをするという形になります。

記者

直接雇っていた方々を民間の方々に変えられるところは変えていこうということですね。あともう1点なんですけれども、おくやみコーナーが令和8年から実施ということなんですけれども、今年から予算に組まれているということで、こちらは手間がかかるから今から計画しているという感じなんですか？

行政経営部長

関連する各部署との調整であったりとか、それぞれの情報システムとの連携のようなどころなどもいろいろと課題があるかと思しますので、そういう準備をするのにあたって、令和7年度中の開始はちょっと難しいという風に判断をしているものと考えております。

記者

はい、ありがとうございます。

吹田市広報課

他にご質問はありますか？

記者

確認なんですけれども、予算規模過去最大で間違いないですよね？

行政経営部長

はい。

記者

了解しました。

記者

市長に伺いたいんですけども、今年、大阪、関西万博が開催されるということで、今回もいろいろと予算にあげてらっしゃいますけれども、市長自身、その期待することとか、何かあれば教えいただきたいんですけども？

後藤市長

吹田市として、吹田市長として大きく期待するのは、1970年万博から55年を経過しました。その55年の間に、人類の進歩と調和は果たしてどうだったのかという岡本太郎さんが投げかけたテーマが、今回55年前を振り返って55年先を読むというある意味哲学的な視点を大いに期待するところです。でなければ、単なる博覧会で終わってしまうという危惧があります。

記者

その中で、付随してですけども、吹田市教育委員会が万博の学校単位の校外学習について、吹田市としては参加をしないという判断をされましたけれども、それについて市長部局、また市長に対してこの一連の中で報告や相談等というのはあったのでしょうか。

後藤市長

教育委員会からですか？

記者

はい。

後藤市長

綿密に連絡を取り合いながら、基本的に何とかして、何とかして行かしてあげたいというスタンスで、粘りに粘ってきたんですけども、タイムアップです。こちらの安全を確認する質問書に対して、十分な満足できる答えが今現在も返ってきていません。やむを得ずの判断です。

それともう一つは、もう来年度のカリキュラムというのを教育委員会は決めますので、それがタイムアップです。12月中か1月初めか、それをお聞きしていたんで間に合わなかった

というのを非常に残念に思っています。

記者

特にどの部分が満足できなかったというところでしょうか？

後藤市長

これは教育監から。

教育監

我々、これ昨年の春ぐらいから万博協会さんが動き出して、いろんなお話を聞くなかで、まず現場の声として熱中症対策のこととか、現場で点呼ができる場所の確保とか、待機場所とか、現場の医療体制とか、現場までの移動とか、様々な不安の声が学校長を通して我々にも入ってきましたので、我々もそういう部分は不安でありましたので、安全に行ってもらうためにも、そういう部分が一番懸念したところです。

記者

その部分は、万博協会や吉村知事は、熱中症対策は万全にやっていくと話されていましたが、市長としてもその辺は少し不安があるかなと？

後藤市長

全然万全ではないと思っています。あれは通路の話です。結局、教育委員会としては、これまで長い経験で校外学習のあるべき姿、安全確認というのはもう全て項目出しはできているわけです。

だから、修学旅行もそうですけれども、安全をちゃんと確認した上で保護者にも説明して実施する。今回はそれが残念ながらできていない。一部、交通問題も、それからこの熱中症対策もというのはありますが、例えば台風が来たらどうするんや、昼ご飯はどこで食べるんや、その時に雨降っていたらどうするん、点呼の場所が入る前と出てきたときにどうも 2 回しないといけない。誰一人こぼしていないか。次のパビリオン入る前にまたやって、また出てきてやってって。それ説明を聞いた時に校外学習大変やなと思いました。だから別に過剰な安全を求めているわけではなくて、基本的な項目を 40 並べているなという印象があるんです。

記者

基本的な項目、質問事項に対しても、市長が満足できるような回答というのが万博協会からなかったという？

後藤市長

協会ではなく、大阪府の教育庁なんですよ。窓口は。

記者

教育庁の方からということですか？

教育監

そうです。

後藤市長

(万博)推進局に確認しますとか、協会に申し入れますとか、それでは答えにならないんで。

記者

おっしゃったように、来年のカリキュラムを考えるならば、やっぱりこの段階で判断しないといけないということですか？

教育監

そうですね。学校というのは年が明けると、次年度の年間計画を組んでいきますので、それが年末、年始というのが我々のリミット、学校現場に対するリミットだったなと考えていますので、今回の判断に至りました。

記者

その中で、吹田市は市教委がきちんとリーダーシップをとって、ある程度の判断をされたということなんですけども、市長にお聞きしたいんですけど、多くの首長、市長に聞いたらすね、この件については学校現場、校長の判断に任せているということで、ある程度市教委を通り越して、学校現場に判断を任せているということによって、私の取材で聞く中では、かなり学校長、学校の先生方がかなり苦勞されているというふうに聞いています。学校現場に判断を任せるとい判断というのは、なかなか吹田市は考えにくかったということでしょうか？

後藤市長

出だしにアンケートを大阪府教育庁から個別の校長にメール？

教育監

メールです。

後藤市長

メールシステムがあることを知りました。それは吹田市の教育庁も通さない。もちろん吹田市長も通さない。個別の校長に対して、「希望しますか？しませんか？」みたいな。あそこから歯車が狂っています。この大きな問題、安全の問題に対して、各個別の校長が判断できる範囲を超えています。これ少なくとも教育委員会が判断をしないといけません。その教育委員会の中で熱中症の課題というのは、教育委員会に専門家がいません。

それから、危機管理体制も行政側にはありますけれども、どうしたら安全を保護者に説明できるかという根拠をどこの教育委員会も大阪府ももっていない。これは行政と教育委員会ともに情報収集して、責任を持って判断しないといかん、うちはそう思いました。他はそれぞれです。

記者

校長に直接メールが届くというのは、府の教育庁からということですか？

教育監

そういうことです。

後藤市長

知らなかったんですよ、教育委員会。

記者

校長の個別判断でこの学校はどうするかという判断するのは、吹田市の校長先生がするというのは、ちょっとやっぱりかわいそうということ？

後藤市長

それは困ると思いますよ。

辰谷副市長

吹田市がというか、実際は大阪府の先生ですからね。

教育監

本来、校外学習というのは、校長先生が判断して実施するものなんですけれども、ただ今回のこの万博に関しては、校長先生の情報が非常に無い状況。我々も無いので、府に対してたくさん質問をさせてもらって、校長会とも連携しまして、校長会の方も市教委の判断は重く受け止めさせてもらうということで、ずっと春から進んでいきましたので、こういう形で吹田市の方は校長会と協議を一体になってやってきた経過があります。

記者

そういう一体となっている自治体が他のみても、私が知っている限りですけれども、少ないのかなというのはあるんですが、市教委としてやっぱりきちんとやっていかなきゃいけないというふうに思われたということですか？

教育監

我々はそう思っています。そういうふうな形で進んでまいりました。

記者

ありがとうございました。

吹田市広報課

他にご質問はございますでしょうか？

後藤市長

余計な情報ですけど、私は環境省の暑熱環境対策委員会の委員をやっています。これももう10年以上やっています。その立場からも、今回の熱中症に関しては一家言あります。科学的な根拠も私にはあるんで、その責任を果たさないといかんという。これは市長の責任とはまたひとつ違うような気がするんですけども、そこは一緒に協議したというのは、一番大きいのがやっぱり夏場の熱中症でしたんで。その特殊性はうちにあるかもしれません。

記者

いくら対策をとったとしても、今の状況と夏場の対策リスクというのはやっぱりあると、熱中症のリスクというのは高いというふうに、市長自身は考えているということですか？

後藤市長

いろんな方法あるんですよ。一番は日陰を作るということです。その点呼の場所が日陰やったら、まだ大丈夫です。ドライミストでもとても対応できるような熱量じゃないんで。後は救護所ですね。そこの対応状況、それもお答えを十分もらってなかったの。必ず熱中症患者が出ますので。

吹田市広報課

そろそろお時間になりますが、ご質問はございますでしょうか？

記者

案件以外のことでもよろしいですか。

吹田市広報課

はい。

記者

すみません、毎回聞いて恐縮なんですけれども。吹田市の社協のことについて、改めて伺いたいんですが、11月の定例会では、部長の議会答弁で詳細なポイントがわかる報告書の提出を求めていますという答弁があったんですけども、その後提出があったんでしょうか？

春藤副市長

詳細な提出は今のところ無いです。これは議会の中でもお答えをしているんですけども、社協の方では適切に対応しているという答えをいただいています。

状況が今の中では判断しかねますので、新年度からは管理職の職員を派遣したいと思っています。そして、問題があるなら改善していくという方向で、実態というのが、今つかんでないので、現状それが一番適切な方法かなど。現状把握をして、改善が必要なところは改善していくというために管理職の職員を派遣したいと。

記者

派遣することによって、今市が求めているその経緯がわかる要望書というのにも、その管理職は関与するんですか？

春藤副市長

そこまでは今のところは考えていませんけれど、実態が要は認識に相違がある可能性が大ですので、社協の方ではもう改善されて、問題がないという認識を持たれているようなので、これは出てこないということはそういうことなのかなと思いますので、確認をするために、現状把握をまずはした上で、その後の対応は考えたいと思います。

記者

市長自身、社協の会長とお会いした際にも、その要望書の件を伝えてらっしゃると思うんですけども、この間、社協が対応というのはどのように市長自身も感じてらっしゃいますでしょうか？

後藤市長

今言いましたように、認識の相違を感じました。こういう問題って、およそ人と人の問題で、深い事情、それぞれに言い分があってというのはよくある話で、そこを形式上で形式的に見

ると、これは問題だという判断ができるんですけども、その背景に文化、ガバナンスがどうなのか、そこを深掘りしないと再発防止にはならない。そういう意味で、ちょっと回りくどい方法かもしれませんが、管理職を一人送り込むというのは通常しません。外部団体に。そこできっちりとガバナンスを利かすということ、それが再発防止につながるという思いであります。

記者

報告書の提出のときにはどのようにされるおつもりですか？そのあと。

後藤市長

未だにないんですけども。恐らく今請求しても同じような報告書が来るんやろうなど。それが根本解決につながるとはちょっと考えられないという状態です。

記者

市の再三の要請に対して、社協がきちんと応じないということなんですけれども、これ普通に考えれば、例えば民間の指定管理者などがガバナンスに問題があれば、市は必ず報告を求めて対応しなければ、指定管理を解消することも可能なんですけれども、社協はなかなか法律的に難しいということもある中で、今回、予算を見ても社協の委託に出ているわけですから、社協の方が市の足元を見ているような、つまり、強く言ってもどうせ来年度以降も事業を続けるだろうと、自分たちの事業が変わらないだろうという風に思っているからこそ、そういう対応をとっているような気がするんですけども、これまでの対応を振り返って、その辺の社協の対応というのはいかががでしょうか？

後藤市長

形式的にはおっしゃるとおりかもしれませんが。ただ、私も今の社協の管理職メンバー、ほぼ全てその人間性も人格を含めて理解しています。

一生懸命調べ、対応してもらっているなどというのはよくわかっております。ただ、その加害者と被害者が存在する案件なので、被害者の方がどう考えておられるのかなというのはまた別問題です。加害者という言い過ぎかもしれませんが、組織側としてこう考えているというのは聞いています。それはそれである意味納得しておりますけれども。

被害を受けたとおっしゃる方の気持ちがどうなのかというのは、また別問題と思っ
ていまして、それを正しく対応するためにも、今の体制ではなく、新たに人を送り込んで、違う組織改編の展開があり得ると思っています。

記者

その個別の細かいところはそうなんですけれど、そもそもどういうハラスメントがあった

のかというのを、お話を把握していないので、どのような期間、どういうハラスメントがあったのかという。

後藤市長

概略は聞いているんですけども、両方から聞かないです。

記者

それがパワハラなのかセクハラなのか、それともモラハラなのか、何かというのもわかっていらっしゃるんですか？概要というのは。

後藤市長

そこまで詳しく説明を聞いていません。

記者

その説明があってから、そういう個別の具体的な問題解決に向けて進む話が前提の資料が出ていない中で、それが可能なんでしょうか。

後藤市長

それは担当レベルで調査をずっとしてきたんですけども、それが限界があるので、今度は内部から変えようという話です。

記者

すいません。以上です。ありがとうございました。

吹田市広報課

そろそろお時間になりますので、ご質問ございましたら、この後担当にてお答えをさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

それでは令和7年2月定例会の記者会見を終了いたします。